崇拜もあらわれていた。佛舍利の崇拜はスツーパ（窣堵波・塔）の建立を急速に促進せしめた。「佛の生前に供養するときと、死後佛塔に供養するときと、同じ心にて供養するならば、その受ける所の果報も同一である」（大毘婆沙論卷一一三）という見解は、有部のみのものではなかつたのであろう。そして塔崇拜の思想は、大乘の見寶塔（法華經）というかたちで、この時期にこの土地で完成するにいたつたとかんがえられる。

從來より學界の一部において、ガンダーラ美術は大乘思想にもとづくものであるとか、あるいはまた、大乘というよりはむしろ部派小乘に關係せしめうるとかいわれてきたが、これは大乘とか部派小乘とかのいづれかにかぎるべきものではなくて、佛教全體を通じて、その當時澎湃としておこつていた佛德讃仰、菩薩思想の昂揚、佛塔崇拜の旺盛な信仰とそれにともなう塔や伽藍の建立寄進の流行、およびヘレニスティック美術の東方における絶えざる活動とに由る所産と見るべきであろう。そして主導的な役割を果たしたものとして、有部の思想とヘレニズム文化の精神とがあげられる。キニク派、キレネ派、ストア派、エピクロス派などは、いづれも超ポリス的に人間の道を探求し、それを人間一般の道として擴大する方向をとつたといわれるが、クシャーナ帝國治下の思想家たちに、これがどのように反映したかすこぶる興味のある問題である。

空觀について

安井廣濟

われわれは、すべてのもの、すべての出来事を、われわれの欲するままにえがこうとするが、佛教は、このようなわれわれの固執・執著の立場を否定して、われわれのえがくところのものが、われわれのえがくままに存在しない、空しいものであるとする。これは、佛教一般に通ずる、佛教の最も根本的な考え方といつてよい。では、何故に、すべてのものが、われわれのえがくままに存在しない空しいものであるか、というと、この點について、佛教では「緣起」ということを説いている。緣起の教説については、學者によつてかなり異論があり、また、佛教思想の發展とともに、その内容にもかなりの異論がみられるが、ともかく、「緣起」とは、「すべてのものが緣つて生起する」ことを意味する。

初期の經典に出ている喩えによつて、この緣起ということを理解すると、たとえば、われわれは自己の住む家屋に愛著をもつ。われわれは自己の住む家屋が崩れないように、自己の家屋の常住に固執・執著する。しかし、〈木材に緣り、蔓草に緣り、稻藁に緣り、泥土に緣り、空間が圍まれて、家屋という名稱をうるにいたる〉(M. N. I. p. 190) のであつて、たとえ、われわれが家屋の常住に固執、執著しても、木材や泥土などの

材料の如何に縁つて、家屋は意外に早く崩れることもあり、一瞬に崩れさることすらありうるでもあろう。すべては客観的な事情如何に縁るのであつて、われわれの主観的な固執・執著は成りたたない。「縁起」とは、このように、「すべてが客観的な事情、因縁の如何に縁つて生起すること」を教えるものと考えられる。そして、それゆえに、「われわれの主観的な固執・執著が成りたたず空しい」ということ、これが、佛教にいう「空」ということであると考えられる。初期の佛教では、ほとんど空という言葉は用いられず、無常とか無我という言葉が用いられているが、すくなくとも、初期佛教ならびに、この初期佛教を傳える上座佛教においては、およそ、以上のような意味をもつて、空観がおこなわれたと考えられる。したがつて、これは、「自我の空観」といつてよい。

しかし、若し、空観が以上のような意味のものならば、空観は、ただ客観的な因縁の事情如何にまかすより仕方がないというような、きわめて無氣力な、客観まかせのあきらめにおちいるよりほかはない。存在するものは、ただ客観的な因縁のみであり、われわれの主観的な固執、執著は、全く無力であり、うつろであるということになつてくる。

しかし、般若中観の大乘佛教によると――すべてが客観的な因縁の事情如何によつて生起するという縁起の教えは、いちおうは、客観的な因縁の存在や力を肯定することによつて、われわれの主観的な固執、執著の立場の否定を語り、空を語ろうとする。しかし、だからといつて、縁起の教えは、客観的な因縁の存在や力を主張し肯定することを目的とした教えではない。主観的な固執、執著が空ぜられた場合には、客観的な因縁の存在も、もはや同時に問題とならず、空ぜられる、というのが、縁起の教えの眞實の趣意である――と考えられている。かくして、般若中観の大乘佛教においては、空より以外に眞實はない。いわいる。「無所得空観」といわれるものが、これであり、この空観においては、主観的な固執、執著の立場を否定することにより、客観的因縁を問題とせず、客観的因縁すら否定して、これに打ち勝つという意味がある。ここに、般若中観思想の空観の特色というべきものがみとめられる。

しかし、主観的な固執、執著の立場を否定することにより、客観的な因縁に打ち勝つという意味があるならば、客観的因縁に束縛されるのは、主観的な固執、執著の立場のためといわねばならない。客観的因縁が悪いとか不安であるというのは、主観的な固執、執著の心のためであり、主観的な固執、執著の心こそ、このましからぬ不安な客観的因縁を作つているといわねばならない。ところで、若し、そうならば、われわれの主観的な固執、執著の立場というものは、まことに矛盾した、悲しむべき姿をしているということになる。なぜなら、われわれの主観的な固執、執著が、このましからぬ不安な客観的因縁を作るとすれば、われわれが固執、執著をかさねればかさねるほど、このましからぬ不安な客観的因縁が作られるわけであり、われわれの主観的な固執、執著は、固執し執著するがまゝには、ついに成り立ちえないからである。これを、瑜伽唯識の大乘佛教は「虚妄」という言葉によつてあらわしている。「虚妄」とは、文字どうりには、非有（abhūta）という言葉であつて、分別し

識別し固執し執著する如くには、非有（＝空）であることを意味する。かくして、瑜伽唯識の大乘佛教は、われわれが唯識の道理を知つて、われわれの固執、執著の心が、まことに矛盾した、それ自身、成り立ちえない、虚妄な空しい性格であることを自覺すべきであるという。この虚妄性の自覺、これが瑜伽唯識思想にみられる空觀である。故に、この空觀は、「唯識空觀」となづけてよい。

以上の、「自我の空觀」、「無所得空觀」、「唯識空觀」の三つは、インド佛教において發達した空觀の三つの型といつてよい。シナ、日本の佛教の空觀も、おそらく、これら三つの空觀を基礎とした發展であろう。

現代社會の諸相と その新しい問題點

藤　田　義　憲

一六二九年にフランシス・ベーコン Francis Bacon は其著 New Atlantis の中で驅て人類の將來の歴史には科學萬能の時代が豫見せられ、其處に於て人類の幸福が期待せられるとして、科學王國の理想仰を夢見て、最大級の祝福をおくつたのである。

斯うした彼の豫想とそれへの期待は、さほど時を俟たずして機械主義文明の開花と、その著しい躍進によつて叶えられたが、彼がその著の結論として强調した人類の幸福は果して招來されたであろうか。成程、ベーコンの當時に比べ現代人は機械主義文明の幾多の恩惠は蒙つている（それらは、主として人間が自然に適應する手段としての機械の利用であつて、狹義の意味における生産技術の領域である。）にしても他の面、即ち、人間と自然との關係ではなくて、人間と人間との關係の領域に於ては、必ずしも幸福がもたらされたとは言い難いであろう。そこには嘗て豫想だにしなかつた人間と人間の間に於ける親和連帶感の喪失と、生（Leben）の一切の領域に於ける不安、緊張、警戒、焦躁、孤獨感にかり立てられているのではなかろうか。（近時、家庭や社會に於ける離婚、別居、遺棄、家出、自殺精神障害者、非行・犯罪の激增に目を向けても、斯かる事情が裏書きされるであろう。）

凡そ人間の社會生活に於ける「親和連帶性」は如何なる社會的條件によつて導き出されるであろうか。人間親和の道は、究極するところ「相手の欲するところを相手に施すことに存する」のである。從つて親和の促進助長にとつての要諦は、相手の欲するところを熟知了解する以外にない。斯く人間相互の具體的個所的な熟知了解の充分ある所では、親和は自然ありがちであり、之に反して人間相互が非熟知であれば、おのずから人々は、俗に言う他人行儀として水臭くなりがちであり、親和への道は塞がれてしまいがちである。

（註、例えば近代大都市の如く、人及び物の移動激しき開放的にして流動的な廣大な社會では、人々が相互に熟知し合う機緣乏しく、その爲に相手方への配慮も自ら失われ